（昭和37年3月12日
第三種郵便物認可）

令和６年４月10日

（第750号）

国民同胞

発行所
公益社団法人　国民文化研究会
（九州←→東京←→全国）
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替　00170-1-60507
電話　03-5468-6230
ＦＡＸ　03-5468-1470
https://www.kokubunken.or.jp
E-mail: info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料　年間2000円

「心を正す」といふこと

―「人心だに正しければ、遽かに国家を失ふに至らず」―

久米秀俊

関東地区の学生や社会人の先輩後輩と一緒に、幕末に生きた吉田松陰の文章を読む「松陰会」を続けて三年になる。最近、読んだ松陰の著書『講孟余話』の以下の箇所について感想を述べてみたい。

「群夷競ひ来る、国家の大事とは言へども、深憂とするに足らず。深憂とすべきは人心の正しからざるなり。苟も人心だに正しければ、百死以て国を守る、其の間勝敗利鈍ありと云へども、未だ遽かに国家を失ふに至らず」（訳・諸外国の軍艦が競って来航して来るのは、国家の大事とは言へるが、深く憂ふには及ばない。深く憂ふべきは、人心が正しくないことである。人心が正しければ、決死の覚悟を以て国を守ることが出来、勝ち負け、優勢劣勢はあっても国家を失ふことはない）（『講孟余話』滕文公下第九章）。

徳川幕府は、ペリー艦隊の軍事的な威嚇に屈して、嘉永六年（一八五三）、本来開港地の長崎で受け取るとしてゐた大統領親書を浦賀近くの久里浜で受け取り、その後の対応においても、旧弊に拘り、幕府、全国諸藩が一体となって国難に対処するには至らなかった。松陰は、かうした幕府や諸藩の対応振りに、「人心の正しからざる」を読み取ったのだと思ふ。

松陰は、国の為に諸外国の動向を学ばうと、国禁を顧みず「下田踏海の挙」を企てて失敗し、獄に投じられた。しかし、自分を信じて見守り、励ましてくれる家族や同志に感謝しつつ、『孟子』などの四書五経や日本の歴史を学び続けるとともに、国防や国政のあり方を考へ続ける。更には、獄中の仲間に『孟子』を講じた。松陰にとって、かうした取り組みが「心を正す」ことであったやうに思ふ。

本年二月十一日、安倍元首相の外交政策スピーチライターであった谷口智彦先生（筑波大学特命教授）のご講演をお聴きし、安倍元総理もまた、松陰と同様に国難の中にあって、「心を正す」ことを続けてこられた方であることを知った。

安倍元総理は、東海旅客鉄道（株）の葛西敬之名誉会長を心から慕ってゐられたさうだ。葛西氏が入院された後、令和四年五月二十五日にお亡くなりになる迄の約一ヶ月間に三度までも見舞はれ、葛西氏の告別式では、「日本の平和と安全を守るためには、日米同盟による抑止力が何よりも重要であり、我が国に相応しい安全保障上の責任を全うすべしとの確固たる信念の下、集団的自衛権の行使容認に道を拓いて頂きました。…（貴方の）『憂国の想ひ』を胸に、これからも国民のため国政に全力で邁進することをお誓ひします」と声涙下る弔辞を述べられた。

安倍元総理は、九年間にわたって国政を担はれ、現実を直視しようとしない野党勢力、前例に拘る官僚などと闘ひながら、平和安全法制の整備、アベノミクスによる経済再生、自由で開かれたインド太平洋構想（FOIP）や日米豪印戦略対話（QUAD）の提唱・推進など、国家の安全保障、経済発展に関はる数々の基本的政策を実現された。その都度、葛西氏のご示唆を受け、「憂国の思ひ」を偲び、心を正して来られたのだと思ふ。

葛西氏が亡くなられてから僅か一ヶ月半後、安倍元総理が凶弾に斃れられた。谷口先生は、ご講演の中で、これから先の十年、日本史上、最大の危機を迎へる中、葛西氏、安倍元総理といふ日本の舵取りのコンパスを失ってしまったと嘆かれた。

軍事的な威嚇を続ける国々に囲まれた我が国が、更に未曾有の危機に直面するとのご指摘に対し、自分は、どれだけ危機感を感じてゐるだらうか。自分が信頼し、慕ふ人の振る舞ひや言葉が、自分の緩みがちな心を正してくれるのだと思ふ。これからも「松陰会」を続け、友らと共に松陰の思ひに迫るとともに、葛西氏、安倍元総理の思ひをお偲びしてゆきたい。

本紙先月号の折り込みで御案内のやうに、来る五月二十五日（土）の当会主催の国民文化講座では、谷口智彦先生をお招きして、「安倍晋三首相が追い求めた美しい日本とは」と題してご講演いただく。多くの皆様の御聴講をお待ちしてゐる。

（一社 日本港運協会理事）